

蘇芳集



山 水

高橋 さえ子

牡丹咲く話

青山

丈

夜は雨の山水ふくむ独活の丈
風を追ひ越してこはれず石鹼玉
試歩続く黄梅に日のさしかはし
母恋へば醍醐の桜吹雪かな
清明の雨の音聞く喪に籠り
師の忌過ぐ浜木綿の風やりすごし
広辞苑七版電子辞書涼し

学校のさくらの下の水を飲む
夕方を一度は桜吹雪くかな
草餅の投函の間の乾きかな
藤棚を出て藤棚を覗きけり
牡丹咲く話を人が持つてくる
牡丹見てそこから家に帰りけり
色出してきた紫陽花に水をやる

蝶生る

木内憲子

三鬼の忌

清水裕子

つくばひにけふの冷たさ蝶生る
呼ばれ咲くやうに桜のひとところ
春日の人ごゑことに密やかな
蟻穴を出て吾が影に紛るるよ
花散るや柱に寄れば刻古りぬ
水の上に散るとき桜急ぎけり
花くわりん犬が遠くで吠えてゐる

花の二週

小島みつ如

長閑けし

真保喜代子

岩に凭るはるか函嶺花がすみ
満開とふ百千の枝の花息吹き
桜満つ常よりながく見つめ合ひ
花筏組むもとどまるささ流れ
雨ぼつぼつ人去る橋の花の冷
介護車けふ花散る川辺ひと巡り
さくら散る過ぐる電車の音に乗り

囀りのほか深閑と寺の昼
奥まつて人の通らぬ桜かな
葉騒かすかに春昼の住宅地
長閑けしや単線の音遠くより
縄文の遺跡近くを耕せり
電車進入春風が帽煽る
神前に進む面に青葉風

むかうから

富田正吉

六 月

野路斉子

むかうから来る人も見る椿かな
濡れてゐる椿はいつもあたらしき
落椿拾ふと眉が重くなる
目薬をさすとふくらむ椿かな
吹き晴れて椿賢くなりにつけり
落椿星降るやうに撒くやうに
落椿途方に暮れてをりにけり

遠汽笛

長沼三津夫

水打つて庭石をまづ浮かしけり
原爆の日や能登沖のきのご雲
突堤の行きどころなき暑さかな
短夜の漁火のはや能登岬
短夜の旅先かとも遠汽笛
休日何するでなく水打てる
能登沖のはや灯れる麦の秋

泰山木の花がわが窓至近距離
蝶健気すずめ健気に梅雨はじまる
暫くを蟾と坐つて居たさうな(孫)
どがどう違ふともなく羽抜鳥
哀れ飛ぶ羽抜けなることひた隠し
泰山木の花に不動の空の位置
でで虫と呼ばれて知らずかたつむり

風感ず

前田陶代子

花どきのしんとあをめる暈の目
一水の一気に霽れし朝ざくら
ゆるやかに人と往き交ふ花万朶
持ち重りして花冷の布かばん
落つばき拾ふ背ラに風感ず
木より木へ鳥翔けて春深きかな
風の音聞く惜春の木のベンチ